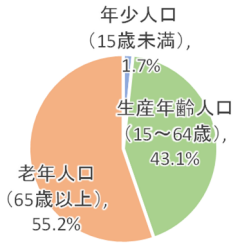
4－02

歌　長（うたおさ）

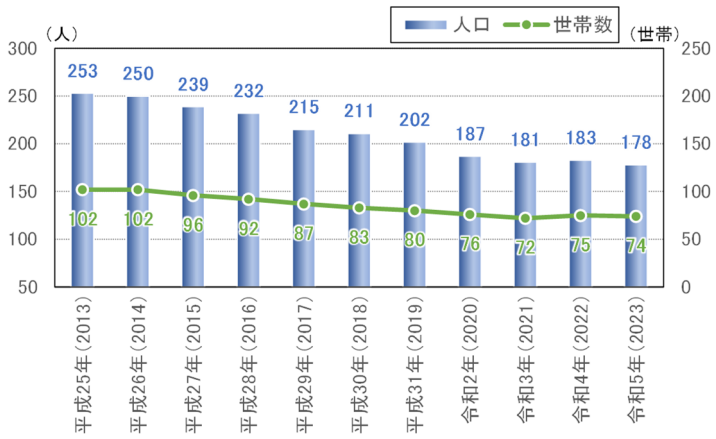
人口・世帯数等（令和５年４月）

人　　口	178 人
世 帯 数	74 世帯
高齢化率	55.2 %

年齢別人口割合



人口・世帯数の推移（過去10年間）



区域の概要

立　　地　集落を北西流する春来川と、支流の芦谷川沿いにわずかな田畑があるほかは、東西に山が迫る農山村である。集落の中を国道９号（山陰道）が走る。

地名由来　天武天皇４年（675）２月、但馬ほか12国に「百姓の歌の上手な者、滑稽な芸をする者、踊りなど上手な者を選んで貢上せよ」との勅命により、この村の歌が最も上手な者が都（飛鳥）に上った。その村民の歌った歌が佳賞されたことから、村の名を歌長と改めたという。また、昔、村人が大蛇に襲われ、両足から次第に飲み込まれていく時に、この人の悲しい歌声が飲み込まれるまで長く続いたことによるという説もある。（「たじま地名考」日本海新聞）

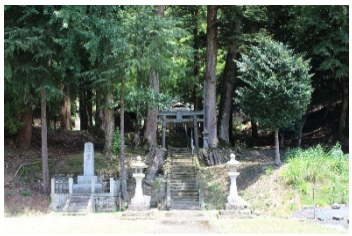
歴 史 等　白毫山山頂には、南北朝から戦国期の温泉城（白毫山城）がある。近世の歌長村は、天正11年（1853）因幡国鳥取城主宮部氏領、慶長6年（1601）同国若桜藩領、慶長10年（1605）旗本宮城氏知行、寛永20年（1643）幕府領、寛文8年（1668）からは豊岡藩領となった。天保5年（1834）の『但馬国郷帳』（天保郷帳）の村高は183石余。枝郷に高山・数久谷がある。特産物は但馬牛で、当村で育成された「ガンクラ蔓」は資質が優秀で改良の素牛となった。

明治22年（1889）温泉村の大字となり、昭和２年（1927）からは温泉町の大字となる。明治24年（1891）の戸数140、人口は男358・女351。但馬全域に飼育された和牛が昭和55年（1980）から不況時代を迎え、和牛飼育の中心的研究機関として農村開発綜合研究センターが設立された。

これまで把握している文化財

文化財の件数　84 件　（うち指定等文化財　2 件）

大分類	中分類	小分類	把握件数			指定等
有形文化財	建造物	建築物	2	4	24	0
		石造物	2			0
		工作物・その他の構造物	0			0
	美術工芸品	彫刻	9	20		0
		絵画	0			0
		工芸品	9			0
		書跡・典籍	0			0
		古文書・歴史資料・考古資料	2			0
無形文化財		音楽	11	11		0
		演劇	0			0
		工芸技術	0			0
		その他の無形文化財	0			0
民俗文化財	有形の民俗文化財	信仰の場	6	6	18	1
		祭具	0			0
		民具	0			0
		その他の有形の民俗文化財	0			0
	無形の民俗文化財	年中行事・民俗芸能	6	12		0
		民俗技術	0			0
		食文化	0			0
		民間説話・俗信	6			0
		その他の無形の民俗文化財	0			0
記念物	遺跡	散布地・集落跡・生産遺跡	3	27	29	0
		古墳・その他の墓	18			0
		城館跡・寺社跡	2			1
		街道・古道等	2			0
		戦争遺跡	0			0
		その他の遺跡	2			0
	名勝地	山岳・高原・丘陵	0	0		0
		海岸・海浜・島嶼	0			0
		河川・滝・渓谷・湖沼	0			0
		公園・庭園	0			0
		その他の名勝地	0			0
	動物・植物・地質鉱物	動物	0	2		0
		植物	1			0
		地質鉱物	1			0
文化的景観		生活･生業･風土により形成された景観地			0	0
伝統的建造物群		宿場町・城下町・農漁村等			0	0

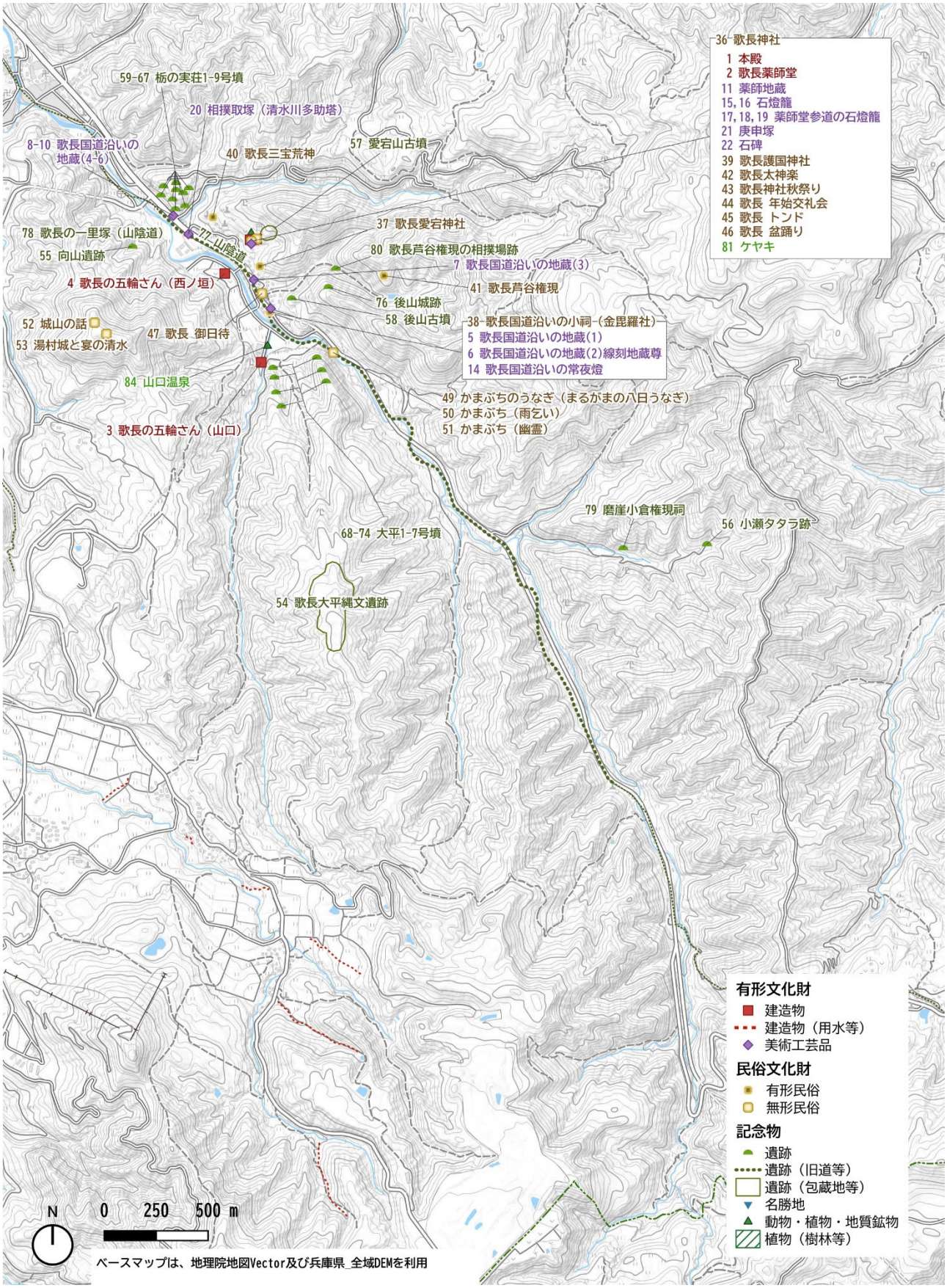

歌長神社

歌長大神楽

温泉城

※人口・世帯数は住民基本台帳（令和５年４月現在）による。

文化財の分布



※所在地の掲載可能なものに限る

4－02 歌長

文化財の一覧

■ 有形文化財／建造物

分類	番号	名称	概要
建築物	1	歌長神社本殿	主祭神である国常立尊が安置されている。三段になる切石で出来た正面約140.5㎝、側面173㎝の土台の上に建てられた木造建築。総欅づくりで、各部分は細かな細工が施されている。屋根は棟千木をのせ、ゆるやかな曲線のある板葺になり、正面前には拝所もついている。春日造の本殿で、天保13年（1842）に再建されたものであり、往時の様子が覆舎に打ち付けられた板文に残されている。
	2	歌長薬師堂	歌長神社参道左、参道脇広場を前面にして、およそ南東向きに間口3間（約6.5m）、奥行き6.6m。石土台の上に柱は主に欅根太、栗屋根桁などの材でできている。現在は三方板囲い、前面開放である。かつては草屋根と呼ばれる茅葺き屋根であったが、昭和33年（1958）に瓦葺となった。
石造物	3	歌長の五輪さん（山口）	35×30㎝の石塔。（五輪塔）。
	4	歌長の五輪さん（西ノ垣）	高さ75㎝、65㎝、63㎝、50㎝の4基の五輪塔。田のそばにあったものを耕地整理のために移転して一カ所に集めたものである。

■ 有形文化財／美術工芸品

分類	番号	名称	概要
彫刻	5	歌長国道沿いの地蔵(1)	金毘羅社の向かい、集落に上がる道の下に祀られている。
	6	歌長国道沿いの地蔵(2) 線刻地蔵尊	金毘羅社の向かい、集落に上がる道の下に祀られている。板石に地蔵尊像が線刻されている。
	7	歌長国道沿いの地蔵(3)	旧道と国道9号の合流点の手前、旧道沿いに位置する。
	8	歌長国道沿いの地蔵(4)	国道9号の高山への入り口の交差点、コンクリート擁壁の上に位置する。
	9	歌長国道沿いの地蔵(5)	
	10	歌長国道沿いの地蔵(6)	
	11	歌長薬師堂の薬師地蔵 （1805年建立）	参道脇広場の山手側に3石碑が並んで位置する。文化2年（1805）6月建立の地蔵尊像。
	12	歌長薬師堂の薬師如来像	薬師堂正面奥の格子戸の中に祀られている薬師如来坐像。阿弥陀如来像とともに祀られている。木像で、創作年代などは不明であるが、火災で焼失した記録が残るため、再建の際に作られたものと考えることもできる。
	13	歌長薬師堂の阿弥陀如来像	薬師堂正面奥の格子戸の中に薬師如来像とともに祀られている。両方の手が肘の部分から欠落するなど損傷がひどかったため、平成18年（2006）に解体・修復された。修復を担当した小谷仏師によると、江戸初期（1630年代）の作で、作者は不明。二尺三寸（約70㎝）で美濃桧づくりである。槍鉋でつくられ、その腹部内には胎内仏（仏頭ホウの木づくり）が収められている。胎内仏は鎌倉時代（1200年代）の作と推定される。
工芸品	14	歌長国道沿いの常夜燈	国道9号と旧道の合流地点に、金毘羅社と並び立つ。自然石型の石燈籠。
	15	歌長神社の石燈籠 （1806年建立）	文化3年（1806）9月建立。歌長神社に設置された石燈籠の中で最も古いもの。参道を登ると鳥居前の右側にある。もとは一対と思われるが、石材（出雲石）からして自然風化し、取り除かれたままになったと思われる。
	16	歌長神社の石燈籠 （1835年建立）	天保6年（1835）9月建立。本殿再建（天保13年（1842））にさきがけて作られたもの。拝殿前に位置する一対。出雲石製で、きれいに形よく加工されている。
	17	歌長薬師堂参道の石燈籠 （1855年建立）	安政2年（1855）6月に氏子中・若連中により建立。世話人平助、民五郎。薬師堂前の石燈籠では最も古いもの。参道右側に位置し、年代は異なるが、大正8年（1919）の石燈籠と一対になっている。
	18	歌長薬師堂参道の石燈籠 （1919年建立）	大正8年（1919）10月に氏子中・青年会により建立。参道左側に位置し、年代は異なるが、安政2年（1855）の石燈籠と一対になっている。

分類	番号	名称	概要
工芸品	19	歌長薬師堂参道の石燈籠（1915 年建立）	大正 4 年（1915）建立。手水場近くに位置する。御影石製。左右一対。大正 4 年の御大典記念に郷軍人会 18 名の有志が建立したもの。有志の中には、日清又は日露戦争に勲功をたてられてか、勲 8 等の勲位を受けた方の名も見える。
	20	相撲取塚（清水川多助塔）	大きな台石の上に細身の塔が建てられている。嘉永元年（1848）に、弟子中門弟達によって建てられたもの。世話人、豪ヶ関、豪ノ松、清水川と銘が刻まれている。以前から国道沿いにあったものであるが、かつては道路をはさんで反対側に位置していた。
	21	歌長薬師堂の庚申塚（1821 年建立）	参道脇広場の山手側に 3 石碑が並んで位置する。文政 4 年（1821）7 月建立の庚申塚。正面には「青面金剛」と刻まれている。
	22	歌長薬師堂の石碑	参道脇広場の山手側に 3 石碑が並んで位置する。正面に梵字が刻まれた石碑。
古文書・歴史資料・考古資料	23	朝野家文書	朝野氏所有。歌長公民館に保管。
	24	歌長愛宕神社の棟札	安永 9 年（1780）、嘉永 2 年（1849）、昭和 32 年（1957）の棟札が残る。いずれも再建棟札。

■ 無形文化財

分類	番号	名称	概要
音楽	25	盆踊り唄(くどき節:鈴木主水)	※『歌長村誌』（平成 19 年、歌長区発行）p190 参照
	26	盆踊り唄（数え唄-1）	※『歌長村誌』（平成 19 年、歌長区発行）p190 参照
	27	盆踊り唄（数え唄-2）	※『歌長村誌』（平成 19 年、歌長区発行）p190 参照
	28	盆踊り唄（数え唄-3）	※『歌長村誌』（平成 19 年、歌長区発行）p190 参照
	29	盆踊り唄（国定忠治）	※『歌長村誌』（平成 19 年、歌長区発行）p193 参照
	30	盆踊り唄（浪花節：忠臣蔵）	※『歌長村誌』（平成 19 年、歌長区発行）p194 参照
	31	盆踊り唄（家珍清姫）	※『歌長村誌』（平成 19 年、歌長区発行）p195 参照
	32	盆踊り唄（お小夜と源兵衛）	※『歌長村誌』（平成 19 年、歌長区発行）p196 参照
	33	盆踊り唄（学校くどき）	※『歌長村誌』（平成 19 年、歌長区発行）p196 参照
	34	石場つき音頭	※『歌長村誌』（平成 19 年、歌長区発行）p232 参照
	35	伊勢音頭	※『歌長村誌』（平成 19 年、歌長区発行）p232 参照

■ 民俗文化財／有形の民俗文化財

分類	番号	名称	概要
信仰の場	36	歌長神社	祭神は国常立尊。弘仁 10 年（819）創立という説がある。古代近妙見大明神といわれていたが、明治初年（1868）に歌長神社と改めた。明治 6 年（1873）10 月に村社となった。
	37	歌長愛宕神社	愛宕さんと呼ばれる。丘の頂上部にある一間四方の建物の中に納まっている。戦前戦後と、年一回は近くの方々で火焚が行われていたが、行われなくなって久しい。由緒等は不明。現在の建物は昭和 32 年（1957）に再建されたもの。
	38	歌長国道沿いの小祠（金毘羅社）	明治 35 年（1902）に有志により、讃岐国の金毘羅神社から分霊をいただいて祀ったもの。社殿は昭和 35 年 5 月 7 日に再建されている。以前は麻疹や疱瘡など子ども達が病気にかかった際には、病気送りと称して、サンダワラに赤色紙の御幣を立てて、赤飯のおにぎりを供えて送ったという。

分類	番号	名称	概要
信仰の場	39	歌長護国神社	歌長護国神社は、昭和 32 年（1957）に新築されたものであるが、それまでは同敷地内には籠堂（武運長久や戦傷病兵の平癒祈願などのために昭和 13 年（1938）に建立）があった。終戦後、第二次大戦で戦死された諸英霊を護国の神として祀り、地域の守り神として祈りをささげるために建てられたものである。
	40	歌長三宝荒神	荒神さんと呼ばれる。村の記録では、祭祀札から弘化 3 年（1846）11 月に再建され、その後はしばらく近所の人でお祭日には、幟を立てたりして祀っていたとのことである。宮の板文や古文書に「下の宮荒神の森」とあるのは、この場所とみられる。
	41	歌長芦谷権現	芦谷滝の手前左手へ山道を登ることおよそ七合目あたりに、祭祀場所に使われた細長い平地がある。急な雑木林の斜面を削り、道をつくり、付近から積石にする石も集め、石垣も積んでいる。20～30 人くらいが居ることができるほどの広さがある。

■ **民俗文化財／無形の民俗文化財**

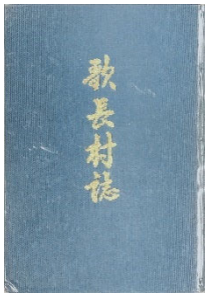
分類	番号	名称	概要
年中行事・民俗芸能	42	歌長太神楽	天保年間（1831～1845）以前より歌長に伝わる神楽で、源流は遊行芸である伊勢大神楽と獅子舞を合わせたもので、獅子舞と立て物で成立する。この地方で飢饉が相次いだ時、伊勢参りをした村人達が神楽を覚えて帰ったのが始まりと言われている。太神楽が現存するのは、但馬では歌長のみで貴重なものである。立て物は、昭和 40 年（1965）頃まで続けられていたが、現在は獅子舞のみ伝承されている。獅子はオス獅子に限られ、毎年 10 月 1 日の祭りの日には、歌長神社での「剣の舞」奉納から始まり、村の家々を廻りお祓いをし、五穀豊穣・無病息災を祈って家の軒先で舞う。笛と太鼓の音にあせて獅子が舞う「剣の舞」、「シングル舞」、天狗と獅子が舞う「ヒョウケンジン」の 3 種類の舞がある。 町指定文化財
	43	歌長神社秋祭り	10 月 1 日に歌長神社で行われる。歌長大神楽が奉納される。
	44	歌長 年始交礼会	1 月 1 日に歌長神社で行われる。
	45	歌長 トンド	1 月 7 日に薬師堂広場で行われる。
	46	歌長 盆踊り	8 月 14 日に薬師堂広場又は公民館前で行われる。
	47	歌長 御日待	1 月第 2 日曜日に行われる。
民間説話・俗信	48	馬の足を引っ張ったかわうそ／三吉ぐち	※『但馬・温泉町の民話と伝説』（昭和 59 年、喜尚晃子編纂、手鞠文庫発行）p110 参照
	49	かまぶちのうなぎ（まるがまの八日うなぎ）	※『但馬・温泉町の民話と伝説』（昭和 59 年、喜尚晃子編纂、手鞠文庫発行）p87 参照
	50	かまぶち（雨乞い）	※『但馬・温泉町の民話と伝説』（昭和 59 年、喜尚晃子編纂、手鞠文庫発行）p126 参照
	51	かまぶち（幽霊）	※『但馬・温泉町の民話と伝説』（昭和 59 年、喜尚晃子編纂、手鞠文庫発行）p164 参照
	52	城山の話	※『但馬・温泉町の民話と伝説』（昭和 59 年、喜尚晃子編纂、手鞠文庫発行）p130 参照
	53	湯村城と宴の清水	※『但馬・温泉町の民話と伝説』（昭和 59 年、喜尚晃子編纂、手鞠文庫発行）p133 参照

■ 記念物／遺跡

分類	番号	名称	概要
散布地・集落跡・生産遺跡等	54	歌長大平縄文遺跡	縄文時代の散布地。縄文時代のものと思われる集石が発見されている。
	55	向山遺跡	春来川左岸の河岸段丘上に位置する。遺構等は未検出であるが、奈良～平安時代の土器片が採集されている。春来峠から出合までで、同時期における数少ない遺物採集地である。
	56	小瀬タタラ跡	弥生～古墳のタタラ跡（生産遺跡）。谷に面した平坦地から谷の斜面にかけて鉱滓が散布。木炭片、焼土なども散布している。豊岡藩領。
古墳・その他の墓	57	愛宕山古墳	古墳時代の古墳。愛宕神社祠の広場に古墳の石材が露出している（川石）。
	58	後山古墳	古墳時代の古墳。トンネルの上に直径 9m余りの円墳 1 基がある。
	59	栃の実荘 1 号墳	古墳時代の古墳。栃の実荘遊歩道を中心に 10 基近くの小円墳がある。
	60	栃の実荘 2 号墳	
	61	栃の実荘 3 号墳	
	62	栃の実荘 4 号墳	
	63	栃の実荘 5 号墳	
	64	栃の実荘 6 号墳	
	65	栃の実荘 7 号墳	
	66	栃の実荘 8 号墳	
	67	栃の実荘 9 号墳	
	68	大平 1 号墳	古墳時代の古墳。歌長トンネル南側、国道沿いの山林尾根にあるが、いずれも一部破壊されている。
	69	大平 2 号墳	
	70	大平 3 号墳	
	71	大平 4 号墳	古墳時代の古墳。1～3 号墳の西側にある 4 つの墳丘。
	72	大平 5 号墳	
	73	大平 6 号墳	
	74	大平 7 号墳	
城館跡・寺社跡	75	温泉城	標高 338mの白毫山に位置する「温泉城（白毫山城跡）」は、主郭を中心に三方向に伸びる尾根に十数段の曲輪を持ち、各々に竪堀や堀切を形成している。また曲輪の形から南北朝時代に起源をもち、戦国期には大改修が行われたと想定される。「二方考」によると、城主は奈良左近とされ、延文元年（1356）に北朝軍の今川義貞が温泉城を攻撃した際に、南朝軍に与同していた人物とされる。城は天正 9 年（1581）に豊臣秀吉の鳥取城攻めの際に落城したとされる。 町指定文化財
	76	後山城跡	中世の城館跡。トンネルの上、北の尾根上に、郭、帯郭数段がある。
街道・古道等	77	山陰道	古代山陰道のルートは、村岡から春来峠を越えて伊角・熊谷を通って井土に出て、その後、岸田川沿いを西へ向かい、蒲生峠を越えて因幡国に入るルートが有力と考えられており、ほぼ現在の国道 9 号に該当する。律令時代の官衙遺跡は井土に集中し、中でも古代山陰道の「面治駅」は竹田の面沼神社付近とされる。
	78	歌長の一里塚	山陰道の一里塚。元禄の「但馬国絵図」では、歌長村の手前で、道が春来川の左岸を通行するところに一里塚が描かれている。
その他の遺跡	79	磨崖小倉権現祠	岩山の巨岩に陰刻で「小倉権現」と彫ってある。摩崖仏。
	80	歌長芦谷権現の相撲場跡	芦谷川の谷あいにある平坦部。ここでは芦谷権現さんのお祭りの盛んな頃には、祭り当日相撲が行われていた。現在はヒノキの大木が生えているが、まわりに相撲見物をしたといわれる小段が残る。

■ 記念物／動物・植物・地質鉱物

分類	番号	名称	概要
植物	81	歌長神社のケヤキ	樹齢400年以上と推定され、大きく2本に分かれた主幹は、長年風雪に耐えてきた力強さを感じさせる。樹高35m、幹回り5.1m。
地質鉱物	82	山口温泉	昔から、旧特別養護老人ホーム前の山口川あたりに噴出しており、寒い時期には区民の女性の洗濯場として重宝され、農家では春籾の芽出しにと使用することもあった。昭和41年（1966）、歌長区はこの地点に温泉ボーリングを計画して採掘を試みたが、84mの地下で急流に出会い、掘削不可能となってやむを得ず中止となった。平成19年（2007）時点では、毎分220～230ℓの湧出があり、温度は24度程度、山口川に放出されている。

自治会の区域における歴史文化・文化財の記録作成等の取組

・『歌長村誌』（平成19年2月、歌長区編集・発行）